

アイルランドのゴールウェイにおける英語の発音(2)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学文学部 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): 英語, アイルランド語, アングロアイリッシュ, アイルランド英語, 発音, 音声学 キーワード (En): 作成者: 中郷, 安浩 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2005032

Title	アイルランドのゴールウェイにおける英語の発音(2)
Author	中郷, 安浩
Citation	人文研究. 30 巻 3 号, p.204-215.
Issue Date	1978
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

アイルランドのゴールウェイに おける英語の発音 (2)

中 郷 安 浩

二 重 母 音

ゴールウェイの町の英語には、二重母音は三つ認められる。[a̠i], [ɔ̠u], [əi] である。

アイルランド英語について、ある程度共通して言えることは、二重母音の第一要素がきわめて短いということである。ゴールウェイの英語もその例外ではなく、上記の三つの二重母音では、第一要素は短く、第二要素への移行は、RP や GA にくらべると、急激な聞こえをもつ。

[a̠i] 第一要素は、C[a] から C[ɑ] の方向にやや後に寄ったところから始まり、C[i] の方向に向けて緊張が加わる。RP や GA の [ɔɪ] に相当する音であるが、聞きなれないうちは、(コンテキストを無視した場合) point が pint のように聞こえる。

oil[a̠il], Joyce[dʒa̠is], join[dʒa̠in], noisy[ˈna̠izi], boy[ba̠i]

TEXT 3 に収録した Mrs. M. のように、第一要素を後方非円唇母音の [ɔ̠] から始めて、boil を [bɔ̠il] とする人達もいるが、本稿で対象とした地域では、[a̠i] が圧倒的に優勢をしめる。

[ɔ̠u] 第一要素は、母音のところすでにあらわれた、C[o] よりもやや下で、かなり後寄りではあるがいく分前寄りの非円唇母音である。第二要素は、[a̠i] や [əi] とちがって、緊張することはなく、[u] の領域内にとどまるようである。しかしながら、緊張した [i] をもつ方言も多く、ゴールウェイでも、TEXT 4 の J.C.C. などは、[ɔ̠u] を用いている。この二重母音は RP や GA の [au] に相当する。

out[ɔʊt], how[həʊ], pound[pəʊnd], house[həʊs], power[pəʊə],
our[əʊə], cow[kəʊ]

[əi] C[ə] のあたりを第一要素として, [a·i] の場合と同じく, C[i] の方向に緊張する音である。RP, GA の [aɪ] に相当する音であるが, アイルランド国内でも, [Ai], [ei] をはじめ, [əi] 以外にも, 地方によって, いくつかの型がある。ゴールウェイでは [əi] が普通だが, I や time を [ei], [tɛim] とする人たちもある。

I[əi], island[əilənd], Irish[əirɪʃ], time[təim], like[ləik], lie
[ləi], my[məi]

半 母 音

[j] 緊張母音 [i] は, 舌の位置が C[i] に相当近く, 緊張の度合の強いものであったが, [j] もそれに相応して, RP, GA のそれよりも, 前よりの高い位置で調音される。後続母音による舌の位置及び形状, 唇の開き, 形状などは RP, GA に準ずるものとしてよいだろう。

ye⁽¹⁾[ji:], yacht[jɔt], use[ju:z], beautiful[bju:təfəl]

ただし, 最後の例などでは, [b] ではなしに, はじめから口蓋音 [b'] を用いて, [b'u:təfəl] とする人たちもある。

[w] これは, RP, GA にくらべて, さらに高く, 後方で調音される。つまり [j]-[w] の間の距離は, RP, GA よりも大きいということになる。また, 唇の丸めもせまいことが観察される。

work[wɜrk], window[windɔ:], what[hwa:t], Galway[gɑ:lwe:],
periwinkle[pɛrəwɪŋkəl]

子 音

子音には, vernacular であるアイルランド語の影響が見られる。この傾向は, Gaeltacht に近づくにつれて濃厚になり, ゴールウェイからほんの数マイルの所にある, Barna という小さな村へ行くだけで, この強いなまりが聞かれる。それに比較すると, ゴールウェイの英語では, 子音に与えるアイ

ルランド語の影響が、かなり薄くさえ感じられる。それでも、ここには、アイルランド以外では見られないいくつかの特徴が色濃く残っていることも事実である。

その一つは、TEXT 2 の M.C. の英語にあらわれる口蓋化(palatalization)である。アイルランド語の子音はすべて broad と slender と呼ばれる性質を有する。それぞれ、velar と palatal に相当するもので、palatal なものは、子音が発音される際、舌が硬口蓋方向に引寄せられ、[i] 的な響きをもつ。この子音の口蓋化を決定する要因となるものは前後にある母音である。アイルランド語には、Caol le caol agus leathan le leathan. [ke:l l'e ke:l
agus l'ahən l'e l'ahən]⁽²⁾ (=Slender with slender and broad with broad.) と呼ばれる法則があり、broad vowels (前方母音のこと) が先行または後続していれば、子音は broad となり、slender vowels (後方母音のこと) が先行または後続していれば、子音は slender すなわち palatal になるというものである。そうすると、子音が二つの母音にはさまれている場合には、その母音は二つとも broad か、そうでなければ、必ず二つとも slender でなければならない。

この口蓋化が英語にも転用されて、M.C. の場合には、far[f'ær], Barna [b'æ:rnə], part[p'ært], large[l'a'rdʒ], tar[t'a:r] にあらわれている。これはすべて [ær] 又は [ar] に先行している場合であって、他の母音の前では目立たない。その他に [ar] の前に生じる例をあげれば、car[k'ar], Carter [k'artər], Martin[m'artin], bar[b'ar] 等がある。Big に [big'] があらわれているが、これも直前の母音 [i] に影響されたもので、big part という句の中で、次の [p'ært] に同化されたものでないことは、(この資料にはないが) big, pig, back が [big'], [pig'], [bak'] となり、末尾に [g'], [k'] がよく聞かれることから言える。末尾における口蓋化は pig, pick [pig'], [pik'] のような、軟口蓋閉鎖音が [i] に続くときに一番顕著であって、他の場合には、ほとんど観察されないようである。

しかしながら、口蓋化をもたない人も多く、上の M.C. などは、ゴールウェイの人にしては、口蓋化が多い方に属していると言えるであろう。

無声音を対立音として持つ有声子音は、末尾では無声音となる。有声子音が連続している場合にも、双方に無声音化が起る。無声音化とはいえ、有声音独特の lenis の性格を残しており、次の記述を、それに対する無声音(たとえば [s], [p], [st]) で置きかえることは不適當である。

use[ju:z], pub[pub], started[startəd], used[ju:zd]

それでは、次に子音各音に移るが、標準英語に照して、大差がないと思われるものは、記述が簡単になり、また用例も省略されることがある。

[p] 両唇無声閉鎖音。標準英語にくらべて多少円唇化するといえようか。
[s] の先行しない、強勢音節の頭で氣息音 (Aspiration) をもつことは RP, GA とかわらない。これは、[t], [k] についても同様のことが言える。

[b] [p] に対する有声音で、多少円唇化を伴うところも [p] と同様である。

[t], [t̪] これらは、/t/ の異音で、相補的分布をなす。[t̪] は歯茎閉鎖音、[t] は、IPA ではなじみのない記号であるが、歯茎まさつ音である。[t̪] の調音点は [t] のそれと同様であるが、舌尖が歯茎に接触せずにわずかに離れる継続音で、舌尖が離れているところから、アイルランドでは、「開いた t」(open “t”) と呼ばれている。これは、外国人には [ʃ] あるいは、[ʃ] より少し前で調音する [ʃ̥] にきこえる。[t] は (1) 末尾において、[s], [ʃ], [n], [l] 等の歯茎音が先行しない場合、

not[nɒt], jet[dʒet], collect[kəˈlɛkt],

と、(2) 強勢母音と無強勢母音にはさまれた intervocalic な位置、

native[ˈne:təv], potatoes[pəˈte:təz], water[ˈwɑ:tər], bitter[ˈbitər]

に生じる。ただし、water のように、[ər] が後続する場合には、後に述べる [ɾ] を用いる人もきわめて多い。このことは、従来も幾多の記述に見られるが、[t̪] に関しては、アイルランド以外では、ほとんど触れられていない。

[d], [d̪] 調音、分布に関しては、上記 [t], [t̪] に準ずる。

[ɾ], [ɽ]⁽⁴⁾ IPA では [t̪], [d̪] が用いられようが、アイルランドでは、これらの大文字が用いられる。舌尖が上前歯に触れるので [t̪], [d̪] でよいのであるが、呼気はそれよりも後で遮断される、すなわち前舌部が歯茎に触れ

そこで第一義的な閉鎖が行われるので、[t], [d] よりも [T], [D] が適当だ
 ということである。⁽³⁾ この音は、まず標準英語の [θ], [ð] の代りに用いられ、
 前述の [t], [d] とともに、相当長期間外国経験があり、一見アイルランド
 風のアクセントを失ってしまったかに見える人たちにまで、最後まで残って
 いる、アイルランド英語の大きな特徴と言える。

[T]: think[ˈTɪŋk], thatch[ˈTatʃ], three[ˈTri:]

[D]: this[ˈDis], other[ˈɒðər], bathe[ˈbe:D]

[T, D] はまた、[r] の直前あるいは子音と [ər] の間にもあらわれ、これは、
 英語の [t], [d] に相当する。しかし、[T], [D] と、[t], [d] が同じ音素に
 属さないのは tin[ˈtɪn] と thin[ˈtɪn], それは bat[ˈbat] と bath[ˈbat] を示
 せば十分であろう。

[T]: tree[ˈTri:], try[ˈTrɪ], straight[ˈsrre:t], after[ˈaftər]

[D]: dry[ˈDrɪ], dream[ˈDri:m], drunk[ˈdrʌŋk]

以上の例からわかるように [r] の前の t と th は、ともに [T] で発音され、
 したがって、tree と three は [ˈTri:]⁽⁵⁾ となって、同音異義語である。

[k], [g] RP や GA と調音、分布の上でかわりがない。なお、アイルラン
 ド語の lough (=lake) や curragh (=wicker-work boat covered with
 tarred linen) もアイルランド語では [x] が用いられるところが英語化して
 [læk], [ˈkurək] と発音される。

[f], [v] 調音については上前歯が下唇の裏側に接触するという点で、RP
 やGAに準ずると言えるが、まさつはかなり弱くなる。多くの方言では、[ɸ],
 [β]⁽⁶⁾ が聞かれるが、ゴールウェイでは、[f], [v] が主流をしめている。われ
 われの資料では、TEXT 4 の資料提供者、J.C.C. に [ɸ], [β] が一貫して聞
 かれる。これはアイルランド語の発音がそのまま流用されたものである。

[s], [z] 調音に関しては、一般に舌先のもち上り方が高く、上歯茎と舌先
 の間にできる溝が小さくなり、非常に強いまさつの残響を残す。とくに無声
 音 [s] において強く感じられる。方言では st, sp, sk の結合で [ʃ] が用い
 られることがよくあるが、ゴールウェイの市内では、ほとんど聞かれること

がない。

[ʃ], [ʒ] とくに [ʃ] において、まさつの力が強く、ドイツ語の [ʃ] に近い響きを有するのが特徴と言える。

[h] House[həʊs] や here[hi:⁽⁷⁾r], horse[hɔ:s] のように、強音節に先立つ場合には、調音時に力が加わる。

また、whで始まる語は一様に [hw] で発音される。

what[hwat], when[hwɛn], whisky[¹hwiski]

[tʃ], [dʒ] 第二要素の [ʃ], [ʒ] のまさつが、とくに語頭において強く聞こえる。綴字 t 又は d+u において、[tʃ] ([dʒ]) または [tj] ([dj]) の両方が認められている場合でも、われわれの方言では、もっぱら [tʃ], [dʒ] を用いる。

Tuesday[¹tʃu:zdei], Tuam (地名) [tʃu:m], educate[¹ɛdʒuke:t],
schedule[¹skɛdʒu:l]

[m], [n], [ŋ] これらの鼻音は調音の上では、英語のそれとほとんどかわりがないので、ここに一まとめにするだけで、特別な説明は加えない。ただ語中の ng は、語によっては [ŋ] となって、[ŋg] というように [g] をともなわないようである。たとえば、England は一様に [¹ɪŋlənd] と発音されている。英語ならば [¹ɪŋglənd] と同様に [ŋg] と発音される他の語、たとえば finger については、残念ながら資料が不足している。⁽¹⁸⁾

[l] この記号は、文字通り、「明るい l」(clear “l”) をあらわすもので、[l] と [ɫ] を簡略表記して [l] としたものではない。アイルランドではすべての位置で [l] が用いられ、母音及び [j] の前では clear “l” が、子音の前及び末尾では dark “l” があらわれる RP とは異っている。

[r] この [r] は調音及び分布において、アメリカ英語と共通した点がある。すなわち、調音方法としては、そり舌 (retroflex) で、半母音であり、本来は、[j], [w] と同列に扱われるべきものである。また、綴字 r が、い

かなる位置にあっても発音されるところも、GA と共通している。このそり舌音の [r] は、アイルランドのかなりな広範囲に及んでいるが、南西部の Kerry では舌先振動音の r (lingual trilled “r”) が聞かれる。

以上、ゴールウェイでの英語の発音ということに的をしぼって、音声学的に記述を行ってきたが、「音声学的に」というのであれば、もっと精密な表記ができる筈であり、またそうなければならない。さらに、音声学的な資料により、音韻論的にまとめあげる仕事も残っている。今更になって、筆者自身、ゴールウェイの英語とは何なのか、どんな特徴をもっているのかという問に対し、はっきりと答を出すにはとまどいを感じている。一つには、音声の細部にまでわたって正確に聞きとり、それを正確に記述する訓練がまだまだ未熟であると認めざるを得ないからであり、また一つには、対象とした方言が、urban dialect ということで、rural dialect のように、人口の出入りも少く、安定した状態にある言語とは異っている点である。いなかの町とはいえ、常に流動を続けている所では、人々のことばも、常に新しい、あるいは異った刺激に対してしているわけで、どれだけ、ゴールウェイという町の伝統的発音が、資料提供者に保たれているかは、一年弱の滞在では、断定し難い。また、アイルランドにも、General Anglo-Irish と呼ばれるものが定着しつつあり、資料提供者の英語も、この General Anglo-Irish と共通している点が多い。

しかしながら、従来わが国では、このような、英語の一方言の研究は比較的少い。アイルランド英語に関しては、総合的なものを二三数えるのみで、それも P. W. Joyce の影響が強い。本稿が Joyce からの脱却という意味において、今までのアイルランド英語研究に少しでも新しい事実をつけ加えることができれば幸いである。

TEXT 3

(Mrs. M. 女子, 50代, 魚屋のおかみさん)

They are scallops. They are sixteen pence a pound. You clean
 ðeːr ˈskələps ðeːr ˈsiksɪtɪn ˈpens ə paʊnd jə ˈkliːn
 them first. They grow on to the rock, you know. Just take that off
 ðəm ˈfɜːst ðe ˈgrəʊ ɒn tə ðə ˈrɒk jə nɔː dʒʌs ˈteɪk ðæt ˈɒf

them. And you boil them. And wash them and boil then. Make a
 dæm ən jə 'bɔɪl dæm ən 'wɒʃ dæm n bɔɪl dæm 'meɪk ə
 beautiful sauce. As soon as they hit the boil, they open, and then
 'bʊ:tɪfl 'sɑ:s əz 'sʊ:n əz dɛː hit də bɔɪl dɛː 'ɔ:pən ən dɛn
 you strain them like you do potatoes. You hold the water. And put
 jə 'streɪn dæm ləɪk jə du: pə'te:təz jə 'hɔ:ld-də 'wɔ:tər ən put
 the saucepan under the cold tap and strain them. Take the fish
 də 'sɑ:spən ʌndər də 'kɔ:ld 'tæp ən 'streɪn dæm teɪk də 'fɪʃ
 out. And use back the top of the water for a sauce whatever
 ʌʊt ən 'ju:z bæk də 'tæp ə də 'wɔ:tər fərə 'sɑ:s hwatevər
 amount you want of it. Mixes beautiful. Put vegetable with it or,
 ə'maʊnt jə 'wɒnt əv ət meɪks 'bʊ:təfəl put 'vedʒəbəl wɪt əd ər
 you know, just onion and add flour to it and makes a lovely white
 jə nɔ: dʒʊst 'ʌn'ən ɪd 'flaʊr 'tu:ət ən meɪks ə lʊvli 'hwəɪt
 sauce, type of thing, you know. Did you ever try them? Would you
 'sɑ:s təɪp ə tɪŋ jə nɔ: dʒevər 'trai dæm wɪdʒə
 like some? They can last now. They are good now for Monday or
 ləɪk sʌm dɛː kən 'lɑst 'nəʊ dɛː ər 'gu:d 'nəʊ fər 'mʌnde ər
 Tuesday, but not to put them in a fridge. Leave them out in the
 'tʃu:zdeː bʊt 'nɒt tə 'put dæm ɪn ə 'frɪdʒ li:v dæm 'ɔʊt ɪn də
 yard in a bucket. Or just atmosphere of the sea type of thing,
 'jærɔd ɪn ə 'bʊkət ər dʒʊst 'atməsfɪr əv də 'si: təɪp ə tɪŋ
 you know. Don't put water on them... just themselves because
 jə 'nɔ: 'dɔ:n ɪput 'wɔ:tər ən dæm dʒʊst dæm'seɪlvz bɪkəz
 our water, there's lime in it, you see. Just a grill or boil it in
 ɔʊr 'wɔ:tər dɛz 'ləɪm ɪn ɪt jə si: dʒʊst ə 'grɪl ər 'bɔɪl ɪt ɪn
 water, you know, a saucepan or pour boiling water on it and leave
 'wɔ:tər jə nɔ: ə 'sɑ:spən ər 'pɔ:r bɔɪlɪŋ 'wɔ:tər ən ɪt ən li:v
 it in a bowl for a while and that cooks it as well. They don't take
 ɪt ɪn ə 'bɔ:l fər ə 'hwəɪl ən dæt ku:ks ɪt əz 'wel 'dɛ: dɔ:n 'teɪk
 much cooking really, you know.
 mʌtʃ 'ku:kɪŋ rɪ:li jə 'nɔ:

TEXT 4

J.C.C. 男子, 50代, 大学分校の監理人, Mayo 生れだが,
幼児期よりずっとゴールウエイに定住。

My fancy is hurling. I like to see a good hurling game or a good
mæi 'fænsi iz 'hʊrlɪŋ ə'i ləɪk tə 'si: ə gud 'hʊrlɪŋ ge:m ə ə gud
football match. Or even I like a good soccer match. But my first
'fʊtbɔ:l matʃ ɔ: i:βn ə ləɪk ə gud 'sɒkər matʃ bət mæi fɜ:st
love is hurling. I played a bit of hurling in my time. And I like
'lʊv iz 'hʊrlɪŋ əi 'ple:əd ə 'bit əβ 'hʊrlɪŋ ɪn mæi 'təɪm ən ə 'ləɪk
a good hurling match and I like to see good teams playing. I saw
ə 'gud 'hʊrlɪŋ 'matʃ ən əi ləɪk tə 'si: 'gud 'ti:mz 'ple:n əi 'sɔ:
Jim Moylan's team, Kilkenny, playing in the last all Ireland against
'dʒɪm 'mɔɪlənz 'ti:m kɪl'kɪni 'ple:n ɪn ðə last ɔ:l əɪrlənd əɡɪnst
Galway. We thought Galway were going to win, though Gaillimh*
'ɡɔ:lweɪ wi 'tɔ:t 'ɡɔ:lwə wər ɡʊ:n tə wɪn ðʊ: 'ɡaɪə
beaten by better teams. But I like the game of hurling.
'bi:tən bæi bɛtər 'ti:mz bət əi 'ləɪk ðə 'ge:m ə 'hʊrlɪŋ

But there was a tale told. They compare, like you compare now
bət ðɛr wəz ə 'teɪl 'tɔ:ld ðɛ kəm'peər ləɪk ju: kəm'peər nəʊ
games in Japan, what there were in former days to what things
'geɪmz ɪn dʒə'pæn 'hwa:t ðɛr wər ɪn 'fɔ:rmər 'deɪz tə 'hwa:t 'tɪŋz
are like now in the line of games, whatever games, you know,
ər 'ləɪk 'nəʊ ɪn ðə 'ləɪn əβ 'geɪmz 'hwat'evər 'ge:mz jə nɔ:
whatever is your favourite games in Japan. And there's a tale
hwa:t'evər ɪz jər 'fɛ:brət 'geɪmz ɪn dʒə'pæn and-ə ðɛrz ə 'teɪl
told about... in Ireland where they compared to what the men were
'tɔ:ld əbʊt ɪn 'əɪrlənd hwɛr ðɛ: kəm'peəd tə 'hwɔt ðə 'mɛn wər
like nowadays hurling to what they were in former days and I
ləɪk 'nəʊwə'deɪz 'hʊrlɪŋ tə 'hwɔt ðɛ wər ɪn 'fɔ:rmər 'deɪz ən əi
asked this old fellow, "Were they as good o' men now as they were
ɑ:st ðɪs 'ɔ:l 'fɛ:lɔ wər ðɛ əz 'gud ə mɪn 'nəʊ ɑz ðɛ wər
then?" And he said, "No," because he remembers being at a hurling
'ðɪn ənə 'sed 'nɔ bə'kɑ:z hɪ rɪ'membərz bi:ŋ ət ə 'hʊrlɪŋ

match where Kilkenny and Tipperary were playing way back forty
 |matʃ hwɛːr kilˈkɪnɪ en tipəˈreːri wɜːr ˈpleːən wɛə ˈbak ˈfɑːrtə
 years ago, and that the referee was up in a tree. You know the
 ˈjiəz əgə an ðæt ðə rɛfəˈriː wəz ʊp in ə ˈtriː jə ˈnɔː ðə
 referee? He was up in a tree. And the only time he blew the whistle
 rɛfəˈriː hiː wəz ʊp in ə ˈtriː an di ˈɔːni ˈtəim iː ˈbluː ðə ˈhwisl
 was when there was a stretcher needed. That's how he compared
 wəz hwɪn ðə wəz ə ˈstretʃər niːdɪd ðats haʊ ˈiː kɒmˈpeəd
 the fellows of former years, that they were so tough as against the
 ðə ˈfɛləz ə ˈfɑːrmər ˈjiəz ðæt ðə wɜːr sʊ ˈtʊʃ əz əɡɛnst ðə
 fellows now.
 ˈfɛləz ˈnəʊ

There's a famous... you heard about Father Tom Burke. He was
 ðɜːz ə ˈfeːməs jə ˈhərd əbaʊt ˈfɑːdər ˈtɒm ˈbɜːrk hiː wəz
 a priest. He was a famous preacher. I don't remember meself
 ə ˈpriːst hiː wəz ə ˈfeːməs ˈpriːtʃər ˈəi dɒn ˈtriːmɛmbər miːsɪ
 before my time. He was a Dominican father. The church is there
 biˈfɔːr məi ˈtəim hi wəz ə dəˈminikən ˈfɑːdər ðə ˈtʃɜːtʃ əz ˈðɜː
 in Claddagh, the Dominican church, and he was a Dominican
 in ˈkladə ðə dəˈminikən ˈtʃɜːtʃ ən hi wəz ə dəˈminikən
 father. There's a big monument tomb there. As you go up on one
 ˈfɑːdər ðəz ə ˈbig ˈmɒnəˌmɛnt ˈtuəm ðɜːr əz jə gəʊ ʊp ən wʌn
 of the bridges you see a big monument there. It's Father Tom
 ə ðə ˈbrɪdʒɪz jə ˈsiː ə ˈbig ˈmɒnəˌmɛnt ðɜːr ɪts ˈfɑːdər ˈtɒm
 Burke. Well then there was a hurling team in the Claddagh and the
 ˈbɜːrk wɛl ðɪn ðə wəz ə ˈhɜːlɪŋ ˈtiːm ɪn ðə ˈkladə and ðə
 Claddagh called Father Toms. They called them after this man.
 ˈkladə ˈkɑːld ˈfɑːdər ˈtɒmz ðɜː ˈkɑːld ðəm aftər ˈðɪs ˈmæn
 And there were some famous men there, you know, famous hurlers
 an ðɜː wə sʌm ˈfeːməs ˈmɛn ˈðɜːr jə ˈnɔː ˈfeːməs ˈhɜːlɜːs
 in their time. But, it's all past by now. I played with the Father
 ɪn ðɜːr ˈtəim bʊt-ə ɪts ˈɑːl ˈpɑːst bæi nəʊ ˈəi ˈpleɪd wɪð ðə ˈfɑːdər

Toms when they restarted them again, but it's all past but no longer
 'tamz hwɛn dɛː rɪˈstaːrtəd dəm əɡɪn bʊt əts aːl paːst bʊt nɔː lɒŋər
 in being now. But, there's a song about the Claddagh about this
 in 'biːŋ 'nɔː bʊt-ə dɜːz ə 'saːŋ əbʊt də 'kladə əbʊt-ə 'dis
 famous team, famous about the priest. There's a tradition there that
 'fɛːməs 't'iːm 'fɛːməs əbʊt də 'priːst dɜːz ə trəˈdɪʃən dɛːr dət
 at a certain time in the year the Dominican Fathers go out in the
 ət ə 'sɜːrtən 'təɪm ɪn də 'jɪər də dəˈmɪnɪkən 'fæːdɜːs ɡoː 'ɔːt ɪn də
 sailing boats but the sailors... and they blessed the bay there for a
 'seːlɪŋ 'bɔːts bʊt də 'seːlərz and dɛ 'blɛst də 'beː dɛːr fɛdər ə
 good harvest for the fishermen, for the safety of the fishermen. But
 'ɡʊd 'hæːrɪst fər də 'fɪʃərmən fər də 'seːfti əz də 'fɪʃərmən bʊt-ə
 at one time they used to have a big fleet of trollers there and
 ət 'wʌn 'təɪm dɛ ʃɪstə hæz ə 'bɪɡ 'fliːt ə 'trɔːlərz dɛːr an
 fishing boats, but that's dying away now, too.
 'fɪʃŋ bɔːts bʊt dats 'dəɪn əˈweː nɔː tu

*Gaillimh=Galway のアイルランド名。

注

- (1) ye 二人称複数の主格及び目的格として、単数をあらわす you と区別して、今でも用いられている。
- (2) アイルランド語は、大きく分けて、East Munster, West Munster, Connacht, Ulster の方言があり、それぞれ発音が異っている。ここにあげた発音は Cork と Kerry を含む West Munster のもので、Myles Dillon & Donncha Ó Cróinin, *Teach yourself Irish* (The English Universities Press, 1961) の巻末 glossary による。
- (3) これは筆者が留守中、指導教授から口頭で教えられたことである。
- (4) 拙稿「アイルランド英語の歯裏閉鎖音に関する報告」(『人文研究』第27巻、第10分冊)は、この音を [t], [d] として取扱ったものだが、[ər] の前にはもっぱら [t], [d] が用いられるとして、[t], [d] にはふれなかった。これは、取材の対象となった地域の差でもある。
- (5) 筆者が留学中、近所の8才の女の子に、spelling game と称して、筆者が口頭で与える単語を書取らせていたときのことであるが、その語の中にわざと three を含み、[θriː] と発音したところ、[triː]? Which[triː]? Is it one, two, [triː]? Or that [triː]? といって、家の外の sycamore を指さした。

- (6) P. L. Henry, *An Anglo-Irish Dialect of North Roscommon* (Dublin), p. 59
 では、「よい方言では、音素 *f*, *v* の異形は両唇音である」としながら「とくに若い年
 令層では *f*, *v* が目立ってきている」という趣旨のことを述べている。
- (7) Cf. Henry, *op. cit.* p. 63.
- (8) Henry, *op. cit.* の Glossarial Index (pp. 213-236) では, England[^hɪnland],
 finger[^hɪŋɡər] となっていて, 異った発音を示しているが, Henry のものが rural
 dialect とすれば, われわれのものは urban dialect. であり, North Roscommon のも
 のから Galway のものを類推することはできない。